

## 6. 人間観

### 6-1-2. 技能による人間の分類

マタギや魚とりができない人はウェンクル *wenkur*「貧乏人」だ。そういう人は山でクマがとれると手伝いに行って肉や魚を背負いに行く。腹わたをもらったり、骨をもらったりする。そういう人は、エムビス サクペ *empisu sak pe*「猟・漁運に恵まれない人」だ。

またこのような人は、根性が悪くてアキアジとりに行ってもとれないような人で、物も隠して人に分けてやらない人でこれをイペ ムナラ (クル) *ipe munar(kur)*という。

そういう人は守り神(セレマクコロカムイ *seremakkorkamuy*)が付いていない人で守り神というのは人間の両肩についているものだ。(6-4-5 参照)

何でも食べて、しかも食べるのが速い人を、イペヌ ニシパ *ipenu nispa* という。

[森崎幸雄氏]

### 6-1-3. 身分・家系による分類

#### 葛野氏の家系

森テキゾウ(母方の祖父でテクトック)は、母が7~10歳の時、歌笛(ケリマイの沢)の山でクマに殺されたが(大正7年)、母親に語った話では、何百年も前の話だが、その先祖は根室方面から来て、カムイ エカシ *kamuy ekasi*「先祖の元」には、3人の息子と1人娘があったが、じじやばばが他界(カムイ カル オンネ *kamuy kar onne*)したら、1人の息子は東へ、2人の息子は西へ行けと言った。十勝のオイカナイ *oikanai*(老華内)のトー *to*「沼」で、死んだじいさんを葬った。そこに松を植えた。現在はセカナイと呼んでいる。東へ行った息子は、十勝へ行った。西へ行けと言われた息子達は、女の子を背負って様似まで来たが、そこで様似の女と結婚し、女の子は、様似に置いてきた。その系統は、赤田梅太郎と言って数え80歳になって今でもいる。2人の息子は、静内の奥へ行って東の沢スマカプケ *sumakapke*(石が平らなところ。そこで雨ごいをした。)に移り住んだ。それから下って田原(トープツ *toput*)に住んだ。その子孫が父方まごじいさんの森テキゾウ(アイヌ名テキトック エカシ *tekituk ekasi*)だ。森辰二さんはサクウリという姓であったがばあさんが森テキゾウの系統なので森の姓になった。もう一人はそこからさらに新冠へ行った。その子孫がどうなったか分からない。

パセオンカミ *pase onkami*とは、自分の先祖に対するオンカミ *onkami*「お祈り」のことで、母親から聞いた話では、父親の先祖の元は、何百年も前のことだと思うが、静内の入船の岩の上からたくさんの白鳥に連れられて生きてままた天界に上がった女で、下界での名をパケ ママツ フチ *pake mamat huci*、天界での名前をシトキ マツ フチ *sitoki mat huci* という。下界から天界に上るときの様子を歌ったウポポ *upopo* が残っているが、音のみでどんな意味なのか分からない。白鳥が何百と来て岩から先祖を連れて行くときの様子だと言う。

- 1) ハンロ エーイ ハンローイ hanro ej hanro:j
- 2) ハンロ ロー ワ エーイ ハンロー hanro ro: wa ej hanro:
- 3) ハンロ エーイ ハンローイ hanro ej hanro:j
- 4) ハンロ ロー ワ エーイ ハンロー hanro ro: wa ej hanro:

父親は、9歳の時になくなっているの母親から聞いた話だ。

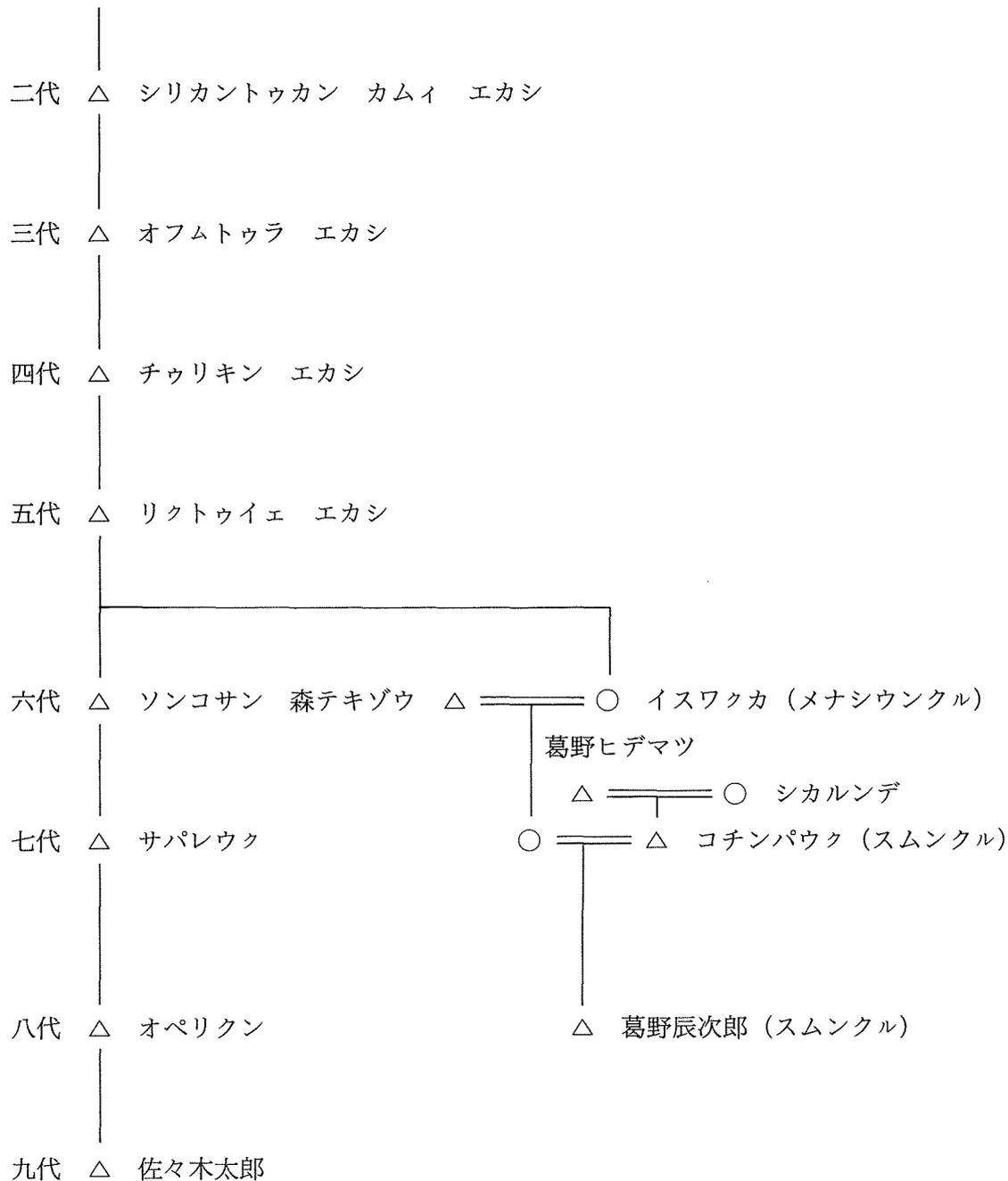
イチャルパ icarpa「先祖供養」でも先祖に向かって「見守り下さい」とは言わない。あの世では何でも逆になるから、かえって悪いことが起きるからだ。神には「見守りください」と直接頼んでも良い。祭り事があってもパセ オンカミ pase onkami「先祖への祈り」をする。オンカミをするのは、雄弁でなくてもよい。その家のものしかできない。同じ先祖を持つ人の中では、一番偉い人にやってもらう。他の家の人がその家のパセ オンカミ pase onkami をすることはできない。

[葛野辰次郎氏]

私（葛野氏）が知っている自分の先祖の名は次のものである。アイヌの名前は子どもの頃の動作によって名付けるので、よく意味の分からないものが多い。初代はノチウノ エカシ nociwno ekasi といい、この名は星（ノチウ nociw）と関係があるらしい。二代、シリカントウカンカムイ エカシ sirkantukan kamuy ekasi、三代オフトウラ エカシ ohumtura ekasi（歩けばカクランカクランと音を立てる）、四代、チャリキン エカシ ciwrikin ekasi（シヤモの人。開拓にきて行き倒れになり、オフトウラ エカシに厄介になり、精神の良い人なので、その娘と結婚した。春立のちょっとむこうに橋のかかった小沢がある。その川に水を飲みに行ったら、川の中にうつ伏せに倒れていて、その上を水が越えて流れていた。そこを助けられたので、この名がついたらしい。）その系統がリクトウイエ エカシ riktuye ekasi だ。この人は、昆布採りに行って、舟から昆布採りの道具で切り取るのがうまかった。この人の系統はたくさんいる。彼の息子はソンコサン sonkosan というエカシ。そのソンコサンの妹が私の孫ばあさん。ソンコサンエカシの息子がサパレウク sapareuk というじいさん。サパ sapa は「頭」、レ re は「名」ということ。サパレウクの息子がオペリクン operikun という。日本名は佐々木飛吉。この人はカジキマグロをとる槍（オブ op）を使うのが上手だった。その息子は佐々木太郎という。太郎のアイヌ名はわからない。オペリクンは雄弁で、なんでも知っていた。私はオペリクンとふた従兄弟の関係にある。まごばあさんとオペリクンがきょうだいだったから。まごばあさんはイスワッカ isuwakka という。ス su は「鍋」、ワッカ wakka は「水」。これらの人々はメナシウクルの系統である。嫁は借り物だから、私の母はメナシウクルだったから、死んだらメナシウクルへ送ってやっただろう。

[葛野辰次郎氏]

初代 △ ノチウノ エカシ



[葛野辰次郎氏]

俺の孫じいさんには、北海道と内地と両方ある。北海道のじいさんは森テキゾウ、内地のじいさんは葛野ヒデマツという。ヒデマツは青森で双子で生まれた。これは心中したもの生れ変りだ、ということで、別々に育てて、大人になったら、夫婦にすれば好運うたがない、とやったものだと。そしたら、ヒデマツはその噂を聞いて、怒って、北海道に来て、春立の漁場で働いていたそうだ。そこで、父方の孫ばあさん(葛野シカ、アイヌ名シカルンデ、「なんでもおもいうかばすことのできる女」という意)と一緒にできてきたものが、俺の父親。シカルンデはスムンクルの系統。だから俺もスムンクルだ。シカルンデフチの母親はメナシウクル系統。

俺のスムンクルのじいさんは、豊畑の近くの高台の下の右手に部落があって、そこにいたが、

景気がわるいので、浜へ下がって来て、リクトイエカシの娘と一緒に、できたものが俺の母親。豊畑の昔の名はルペシペという。ルペシペは「近道」のこと。

シャモでは、兄貴の娘と妹の息子は、如何に従兄弟でもはなれていると云われている。結婚できるが、アイヌではどうか、わからない。

[葛野辰次郎氏]

家族に死んだ人がいるときに聞いた文句で一番の先祖がチチャンコバ エカシ *cicankopa ekasi* という名だというのを覚えている。亡夫は誰かから酒をもらう度に自分の母方の先祖のチチャンコバエカシの名を言ってイチャルパ *icarpa*「先祖供養」した。家には先祖代々のカムイエカシ *kamuy ekasi*「イナウの一種」も置いてあったが、今ではもう守る人もいないので三石神社の大きな木のねき（根元）に立てかけて休ませてきた。カムイ エカシにはじいさんのカムイエカシ、生きている人のカムイエカシがあった。私も娘もカムイエカシを持っている。体の弱い人にはカムイエカシを作る。これをエセレマクコレ *eseremakkore* という。パスイ *pasuy*「奉酒箸」、エトゥニブ「片口」*etunip*、タカイサラ *takay sara*「台付き杯」、イナウケ マキリ *inawke makiri*「御幣を削る小刀」もあった。

[三石 M.H.]

タクサ コロ クル

農屋では、カムイノミをしたら、村長だけでなく位の高い人は、タクサ *takusa* を屋根の上（棟の中央）に立てた。50年くらい前までは、タクサを屋根に立てた家が農屋には、何軒もあった（下記の7軒参照）。位の低い人は、タクサを屋根ではなく、ヌサに向って左側に立てた。タクサを立てるのは、スムクルの人達でメラシウクルはこんなことをしない。

タクサを屋根に立ててもよい人をタクサ コロ クル *takusa kor kur* とかタクサ コロ スムクル *takusa kor sumunkur* という。このタクサは笹をイナウに巻きつけて束ねたもので、高さ2尺くらいであった。一般人は、屋根には立てないでヌサに立てた。一般人（屋根に立てない人）のことをウソイウクル *usoyunkur*、ウソイウン ニシパ *usoyun nispa*「隣の人」という。コタン *kotan* の中央部に住んでいる。ウエンクル「貧棒。からっぽやみ、どうにもならん者」は、コタン *kotan* の端に住む。川下側（ヘパシ *hepasi*）かコタンの沢の入口（ナイプトウ *nay putu*）に住んでいる。ウエンクル *wenkur* は、離れて住んでいるし、ウコイタク *ukoitak*「話し」もしない。きついものだ。誰も相手にしてくれない。昔、農屋にもいた。家族持ちもいる。大抵は家内に働かしてヒエ作らせたりして、自分は余り働かない。男は、クマ捕ったり、シカとったり、アキアジとったり、マスとったりして生活するのが当たり前なんだ。クマの皮、シカの皮は舟（チブ *cip*）で青森まで売りに言ったものだ。

[森崎幸雄氏]

昔の農屋コタンには、タクサを屋根につける人が次の7人いた。

- 1) 人里利助：カムイノミの仕方が6と同じ
- 2) 一橋ヨウ吉：カムイノミが6と同じ。ひいばあさんの姉妹か娘をやっている。

3) 松山コトモリ：カムイノミが6と同じ。ひいばあさんの弟

4) 一橋キクジ：ヨウ吉の親戚、カムイノミが6と同じ

5) 森崎トウキチ：落合という姓なのだが、兄弟の仲が悪くて兄から姓をもらえなかったので森崎の姓をつけてやった。カムイノミは落合の兄から教えてもらえなかった。6が親代りになってカムイノミを教えて同じようにした。

6) 森崎シノタ：自分のひいじいさん

7) 杉山キタロウ：最近まで生きていた。杉山キタロウの母親が森崎シノタの娘であるカノ(アイヌ名はカシノテ。自分のまごばあさん)に育てられた、カムイノミの仕方が6と同じ

クマ送りの時のタクサは魔除けだ。カムイ マラット kamuy maratto を左端から2、3番目の水の神(ワクカ ウシ カムイ wakka us kamuy)と山の神(イウォル コロ カムイ iwor kor kamuy)の間に立てた。右端はパーセ カムイ pase kamuy。道内でも一番偉い神で部落を守る神で何の病気も来ないようにキケパルセ kike parse というイナウを捧げる。左端にヌサ コロ カムイ nusa kor kamuy「祭壇の神」がある。タクサ コロ カムイ takusa kor kamuy は、シトゥ イナウ situ inaw に笹を巻き、左端のヌサ カムイ nusa kamuy または、ヌサ コロ フチ nusa kor huci「祭壇の神」の左に立てる。

タクサは流行病が迷って来ないようにと立てる。部落中でドブロクを作って、酒盛りをするときに立てる。タクサを屋根に立てる人達の間で今回はおまえの所、つぎはおまえの所というように持回りで順番に祭りをを行い当番の家の屋根に立てるタクサを作る。1年に春と秋の2回祭りがあって、その時にタクサを屋根に立てる。流行病はたいてい春に流行るので春に祭りを挙げる。古いイナウはヌサ カムイ nusa kamuy「祭壇の神」の前でイワクテ iwakte「送り収める」する。アシリ イナウ アシ asir inaw as「新しいイナウを立てる」。一般の人は、このカムイノミの時に寄付をする。酒盛りは、タクサ コロ クル takusa kor kur のうちの一軒の家で行う。イナウケ inawke「イナウ削り」も、カムイノミもタクサ作りも一軒の家で行う。カムイノミが終わるとイチャルパ icarpa「先祖供養」も挙げる。タクサを作るのは1本のみで祭りをしている家の屋根に立てるタクサである。屋根にタクサを立てる人は、ヌサ(祭壇)にタクサは立てない。

一般人は、自分の家でカムイノミをした時に祭壇にイナウの他にタクサも立てる。

[森崎幸雄氏]

パ コロ カムイ pa kor kamuy「疱瘡の神」が来る時に屋根にタクサを立てる。身分の低いものはヌサの横にタクサを立てる。

[森崎幸雄氏]

### 動物を先祖に持つ家系

自分達がクマの系統だなどということは、ウチャシクマ ucaskuma「先祖の話」で伝える。妻の育ての親は、シャチの背びれをイトクパ itokpa「祖印」に持っていた。

[葛野辰次郎氏]

オオカミの系統の話を母親から聞いたことがある。

今の御園は昔の名を「一父(イチブ)」といった。これは、アイヌ語のエチピエ コタン ecipiye kotan (チピエプ cipiép は「格好の悪いやり方をすること」で人をののしる時、陰口を聞く時に使う。和人とアイヌが結婚したらチピエプ cipiép と言った。)から由来したもので人間とオオカミとの間に生まれた先祖からできた村なのでこの名がついた。昭和8年か9年に一父から御園に改名した。母親がここでオオカミを先祖とする人達に会ったという。背がスラッとして顔立ちのよい人達だったという。

南部藩か津軽藩か仙台か知らないが、昔は5歳にもなればいいなづけにした。いいなづけになった女の子が嫁に行かないと言い張るので、箱だか舟に入れて島流しにした。その流れ着いた所が新冠のトンネルを抜けた西側にある判官岬(ピポプ pipop)だ。昔オオカミの神様が静内の奥のイドンナップ itunnáp 山にいた。散歩しに歩いてトンネルの西に行くと、オオカミはその箱を見つけ、箱を壊すと中に女の子がいた。その女の子をイドンナップへ連れて行き生活していた。アキアジをとりマスをと、クマやシカを捕って暮らしていた。やがて春になるとオオカミと人間の女の子間に子供ができた。それが御園の系統の人だという。織田ステノさんの話だと御園のエカシ達は、一風変わったカムイノミをしていたということだ。

[葛野辰次郎氏]

キツネの系統もクマの系統もヘビの系統もシャチの系統もいる。ケナシコロカムイは立派な美人の姿をしているが、怒ると怖い。ヘビの神様はキナスツ カムイ kinasut kamuy という。ここらへんのコタンではみんなヘビの神に御神酒を上げる。ヌサコロカムイとヘビは関係ない。ヘビの神は男らしい。

俺のまごじいさん、豊畑の山の風倒木を渡って行ったら、帰りにその木の上でキツネがピョンピョン跳ねていた。それで、あぶない、と思って遠回りして帰って来た。

[葛野辰次郎氏]

#### スムンクルとメナシウンクル

アイヌの嫁さんはもらいものでなく、かりものだ。マツ エトゥン「妻を借りる」という。禅宗の女が門徒宗のところへ嫁いで来ても、女は禅宗で送る。しかし、男の子が生まれたり、その子は禅宗で送るようなもので、アイヌ語で言えば、スムンクル sumunkur とメナシウンクル menas un kur の二つの宗教がある。スムンクルの女がメナシウンクルの男に嫁に来ても、メナシウンクルにはなれない。スムンクルのやり方で送る。俺の父はスムンクルで、母はメナシウンクルだ。スムンクルとメナシウンクルの結婚は昔も少なくなかった。宗派が違っても愛というものには国境はないのだ。しかし、近親結婚はだめ。厳しかった。子どもができて、近親はだめだといって、引き離す。ひどいことをやるもんだ。

[葛野辰次郎氏]

嫁は「借り物」だから、死んだ魂は実家のほうへ帰ると言われている。エカシ イキリ ekasi ikiri という言葉は、あまり聞かない。昔々から伝わってきた系統のことをエカシイキリとい

う。じいさんからじいさんへたどる。エカシイキリに女もふくむかどうかはよく分からない。じいさんからじいさんへ宗教を伝えて行くのだ。スムンクルはスムンクル エカシ イキリ sumunkur ekasi ikiri、メナシウンクルは menasi un kur ekasi ikiri を伝える。アイヌの「お経」には、何代も昔からのじいさんの名前を呼んで、系統の者がいま亡くなったから、亡くなった新仏があんたがたのおひぎもとへ行きますから受け取って下さい、と祈る。

[葛野辰次郎氏]

メナシウンクルにスムンクルの女が嫁にくると、できた男の子はみんなメナシウンクルの系統。女の子はスムンクルの系統。おれが14のとき、よそから婿さん(和人との混血のエカシ ekasi だと思うが、よくわからない。体格のいい、ハンサムな人だった。それでもアイヌの方式でなんでもやっていた)に来た人がいたが、生まれた男の子が亡くなった。一般には、婿に来て、男の子だったら、男親の方式で収め(葬式する)、女の子は母親の方式でおくるのだが、それが行き違いになって喧嘩ぶちまいた。詳しく言えば、ここの家の前の松の木があるところに、俺のじいさんの系統の者がいた。そこの家で葬式があったとき、亡くなった者はどうするか、とみんなで相談するわけだが、その時、まちがったことを言って、「この人は男の子だから、私らの方式(母親の方式)でやる」、と言う人がいた。すると、その子のおじさんにあたる人が、「おまえは人間も死人もかっぱらうような精神だから、いなくてもいいからかえってしまえ」と、みんなが泣いている最中にどなって喧嘩をぶちまいた。おじさんが、自分の甥(きょうだいの子ども)にあたる人に文句を言ったのだ。すると、その甥の方は、ぶんぶん怒ってかえっていった。しかし、他の人が、「おまえの方が間違ったことを言ったのだ。それでひねくれてかえってしまったのでは、かえってかっこ悪いから、葬式おわらせてから帰れ」と言って、引き留めて、収めたこともある。

[葛野辰次郎氏]

メナシウンクルは寒い国から十勝から渡ってきた人達だという。

スムンクルは平取と同じように天から先祖が降りた。シビチャリの山ポヨ poyo に先祖が降りたと言われている。

スムンクルとメナシウンクルは結婚してもよい。

[森崎幸雄氏]

スムンクル sumunkur は、日高の暖かい国の人、メナシウンクル menas un kur は十勝、釧路方面の寒い国の人だ。静内にはメナシウンクルが少しいる。東静内には、メナシウンクルが何人かいる。浦河には、メナシウンクルが多い。

スムンクルとメナシウンクルは御幣の作り方が違う。スムンクルは、キケ kike を2段3箇所削り、全部で6箇所になるが、メナシウンクルは、キケ kike を2段2箇所削り、全部で4箇所になる。

[森崎幸雄氏]

メナシウンクルとは昔仲が悪かった。マツエさんは浦河出身で父親がスムンクルで母親がメナ

シウングル。

[森崎マツエ氏]

静内では、シトウイナウ (situinaw) の上部に耳を付けることしない。サルウングル (saruunkur) はする。

静内では、イチャルパ icarpa「先祖供養」に使うイナウを、キケの上部も下部もウラから根元へ削る。

三石のイチャルパ「先祖供養」に用いるシトウイナウ (situ inaw) は、木のウラ (先) を上に根を下の方にして、上部のキケをウラから根元へ、下部のキケを根元からウラへ削る。これをチェホロカケブ ciehorkakep という。自分のじいさんとばあさんにはそれぞれ1本ずつイナウをあげるが、身内や近所の者にイナウをあげない。自分のじいさんとばあさんにあげるイナウはイナウの作り方が違うとのことだが、どう違うのかは聞かなかった。供物はじいさんやばあさんはもちろんその他の身内や近所の人にもあげる。「イナウは遠い人にはやるな」と言われている。しかし、静内では、家の主だった人や近所の人にも1本ずつイナウをあげる。昔は、イナウは「遠い所へはやるな」と言われた。今では、東京でも大阪でもイナウをあげるが、昔はそんな遠くへイナウをあげてはいけなかったと言われていた。

イトクパ itokpa「祖印」は、屋号みたいなものでそれぞれの家で形が異なる。祭壇に捧げるキケチノエ kikecinoe やキケパルセ kikeparse に祖印を付ける。シトウイナウには、イトクパはつけない。イクパスイ ikupasuy「奉酒箸」にもイトクパはつけない。

イクパスイには裏面の先の方に三角の印をつける。これは心臓を表し、サンベ sanpe という。もしこれを入れないとパスイが物を言えない、人間の代弁ができなくなる。

[葛野辰次郎氏]

自分の宗教 (メナシ ウン クル menas un kur「東の者」かスムン クル sum un kur「西の者」か) のシロシ sirosi「印」を kike parse につける。パスイ pasuy「奉酒箸」につけるものとはまた違う。sirosi はイナウ トクパ inaw tokpa「イナウに祖印を削る」して付ける。お祈りを担当するエカシ ekasi「長老」の先祖の印だ。

[森崎幸雄氏]

図5. メナシ ウン クル シロシ menas un kur sirosi (高田エカシ)

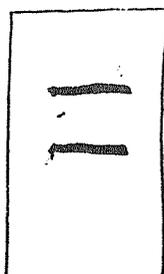


図6. スムンクル シロシ sumun kur sirosi (ノの字型) (森崎さん、葛野エカシ)

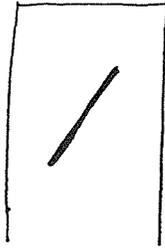


図7. メナシ ウン クル menas un kur のイナウ inaw (2翼)

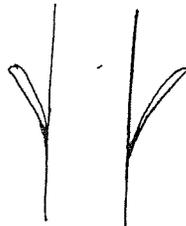
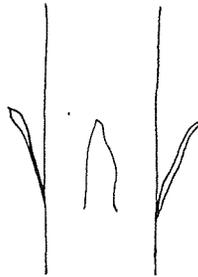


図8. スムンクル sumun kur のイナウ inaw (3翼)



シトゥ イナウ situ inaw にシロシ sirosi はつけない。また、イナウ チキリ inaw cikiri「イナウ」の足」もつけない。キケ パルセ イナウ kike parse inaw にだけチキリを付ける。そのいわれは知らない。

図9. イナウ チキリ inaw cikiri



[森崎幸雄氏]

南部衆とウタリは仲が良かったが、南部衆とメノコが結婚すると決まってその男はトランネカムイ toranne kamuy (怠け者) だ。ひどい怠け者だ (ウェン トランネ wen toranne)。

[森崎幸雄氏]

## 6-2. 身体部位名称

頭をパケヘ pakehe という。ク パケヘ ku=pakehe 「私の頭」、ク パケ アルカ ku=pake arka 「私の頭が痛い」。エ パケヘ e=pakehe 「おまえの頭」。

耳をキサラ kisara という。ク キサラ ku=kisara 「私の耳」。キサランベ kisarunpe は、耳に引っかけて下げる玉。

目をシキヒ sikihi という。ク シキヒ ku=sikihi 「私の目」。

口をチャロ caro という。ク チャロ ku=caro 「私の口」。

舌をパルンベ parunpe という。ク パルンベ ku=parunpe 「私の舌」。

歯：ク マキ ku=maki (?) 「私の歯」。

鼻をエトゥ etu という。ク エトゥ ku=etu 「私の鼻」。エトゥパイ etupuy 「鼻の穴」。

眉毛をラムヌマ ram numa という。

髪の毛をエトピ etopi という。ク エトピヒ ku=etopihi 「私の髪の毛」。

髪の毛が白くなるのをクヘカイエ ku=hekaye という。

肩をタプストゥ tapsutu という。ク タプストゥ ku=tapsutu 「私の肩」。

首をレクチ rekuci という。ク レクチ ku=rekuci 「私の首」。

手をテケヘ tekehe という。ク テケヘ ku=tekehe 「私の手」。ク テケ アルカ ku=teke arka 「私の手が痛い」。

指をアシケペチ askepeci という。ク アシケペチ ku=askepeci 「私の指」。手の指をテケアシケペチ tekeaskepeci という。

腹をホニ honi という。ク ホニ ku=honi 「私の腹」。クホニヒ アラカ ku=honihi arka 「私の腹がいたい」。

足をチキリ cikiri という。ク チキリ アルカ ku=cikiri arka 「私の足が痛い」。

膝頭をコクカパケ kokkapake。ク コクカパケ ku=kokkapake 「私の膝頭」。

尻をオソロホ osoroho という。ク オソロホ ku=osoroho 「私の尻」。

火傷をする ピチツチェ picitce。ク ピチツチェ ワ ku=picitce wa 「私が火傷をした」。

[三石 M.H.]

## 6-4-5. お守り・まじない

守り神は人によって異なる。どの人にも守り神がついている。先祖は自分でその子孫を守ることはできない。神様が守ってくれる。だから、先祖供養でも先祖に向かって自分をお守り下さいと直接頼んではいけない。死者を送るときには、正反対の仕方でするから、先祖に頼んで

も正反対になってしまう。見守ったと思ってもこの世では逆になってしまうのでためだ。先祖を供養するとき何と言っても構わないが「見守って下さい」と言っははいけない。見守ってくれるのは、火の神、太陽の神、水の神、穀物の神などである。残念ながら、アイヌには、空気の神様というのはいない。

守ってもらっているという、恩恵を受けているという事を表すのに、交易してきた物を「神々のおかげでこんなにもうかりました」と言っは神々に渡すことが大切だ。

守り神は、背中についている。肩にのっかっているという。左の肩にのっかっているらしい。カムイノミで酒を捧げるときに右手でイクパスイで左の肩に酒を少し垂らすのは、自分の守り神にやるためだ。右利きだから左の肩に酒をやるのかも知れない。

クタブ オブ ソー カシ オインカラ カムイ エヤイライケレ ku=tap op so kasi oinkar kamuy eyayraykere「私の肩の上についています神、ありがとうございます」と言っは酒を渡す。

奥座敷の東の窓の所（ロルンプヤラ rorunpuyar）に座っているのが家の神で、カムイエカシ kamuy ekasi とも言うがシンヌカムイ sinnukamuy という。この家の神は一軒一軒別な神である。この神の別名は、イセレマク ウシ カムイ iseremak us kamuy という。また、この神の正式な名前は、キナチャウノカ ノヤチャウノカ kinacawnoka, noyacawnoka という。

家の神としてヨモギの人形を作っている人がいるが人形には魂が入るからむやみやたらに作っははいけないと言われている。

イナウのキケ kike は神様の衣であるといわれている。キケが古くなると神様の衣が古くなったことだから取り替えてやるのだ。古い衣であるキケは焼いてやっは新しい衣をつけてカムイノミ「神への祈り」する。

[葛野辰次郎氏]

昭和19年に召集されて戦争に行くとき、シンヌカムイ sinnukamuy を作っは家に置っは行った。妻の育ての親のオペリクン Operikun（佐々木留吉）が作っはくれた。オペリクンは、雄弁家（パウエトク pawetok, パルングル parunkur）であっはた。

[葛野辰次郎氏]

憑き神は、名前は何か忘れたが、これは守り神とは違っはう。

沖からの神が憑くと儲るが、陸からの神が憑くと儲っはた物を全部食っはてしまっはうといわれる。自分の父は、陸の神がついたのでみんなに飲っは食っはさせてしまっはい、最後に山で死んでしまっはた。

[葛野辰次郎氏]

キツネ（チロンヌブ cironnup）の頭を守り神（エムビス カムイ empisu kamuy）としていっはるマタギがいっはる。キツネは人をだますくらだからクマの目もだます。（2-1-4 参照）

[森崎幸雄氏]

ハル カムイ ノミ haru kamuy nomi というお祭りがあっはて、そのために、葉たばこ、

ピットク pittok などのハルネブ harunep を普段とっておく。オムケ カムイ omkekamuy 「風邪の神」(シオカムイ siokamuy とも言う) が来ないように祈る。

[三石 M.H.]

ポロサケ poro sake という祭を秋と春にした。春は樺太の方から疱瘡を持ってくる渡り鳥が来るから、疱瘡が流行らないように願います。畑の作付け前(4月末)に行なう。

[森崎幸雄氏]

#### 6-4-6. 禁忌

女が月経の時、炉のそばを歩いてはいけないと言われた。ロットタ rotta「上座」のカムイ エトコ ペカ kamuy etoko peka「炉の上手近く」歩くものではないと言われた。それはもう厳しかった。

[三石 M.H.]

#### 6-4-7. 悪魔払い

サルンクル「沙流川筋の人」は踊ることをホリブパ horippa という。ホリブパは静内では不時の災難のときやるもの。これはニウエン niwen とも言う。足を踏みしめ、片手に刀を持ち、天に向かってつき、片手に杖を持って地をついて、天もしるべし、地もしるべし、人間が不時の災難でこの世から立ち去るものではない。今後このようなことがあっては、神も神として尊敬できない。今後神様も気をつけ、という意味がある。不時の災難は神の油断。油断につけこんで悪い神がおこすのだ。

[森崎幸雄氏]

### 6-5. 人の一生

#### 6-5-1. 結婚

昔、間男して(ホイヨイウエンテ hoyyoiwente)夫婦別れしたことがある。女はカミソリ(チエイキプ cieykip)で性器を切られた。男は逃げてしまった。火あぶりで白状するまで責められることもある。

[森崎幸雄氏]

#### 6-5-2. 出産

難産の時、ニス nisu「臼」を荷縄で天井から下げて妊婦がその臼にぶら下がる。その臼を他の人が揺する。陣痛はするが子どもなかなか出てこないとき歌う歌がある。

ヘイ ハーブル ヘシ ハーブル ヘイ ハーチリ hey haapur, hes haapur, hey haacir と繰り返す。ハプル hapur とは「柔らかくなれ」、ハチリ hacir とは「降りて来い」という意味だ。

[三石 M.H.]

#### 6-5-4. 命名

昔の人はアイヌの名前を子どもの頃の動作によって名付けるので、よく意味の分からないも

のが多い。

[葛野辰次郎氏]

私は名前を2つ持っている。和人の名前は、幸雄だがアイヌ名はヤイエトウク yayetuk という。「一人でおがる（育つ）」という意味だ。カムイノミの時は先祖に付けられたアイヌ名を言う。父親の顔は知らない。母は6歳の時に亡くなった。給与地は和人に騙されて取られた。自分は親無しで育ったような者だからうまく名前をつけたものだと思う。

[森崎幸雄氏]

## 6-5-6. 葬礼

### 葬式

葬式をイホプパ ihoppa という。「別れて行く」という意味だ。墓地へ行くことをエキムン ekimun「山へ行く」という。

死にかけている人はシソ siso「右座」に寝かす。頭は東に向ける。

死者が「～の山に砂金がある」とか「～に何が置いてある」というように遺言を残すことをイタク スラ itak sura という。

炉にイナウを立てて、カムイフチ kamuy huci「火の神」に頼んで死者にアキアジのスープ（チェブ オハウ cep ohaw）を飲ます。飲ませても飲まなければこの世から去るということだ。年寄り連中が息を引き取ったかどうかを判断する。

死にそうになると、親戚を集める。ノヤサラ コタン noyasar kotan から浜のウラペツ urapet までリレー式にホイホイ ウオーイと女の高い声で叫んで死んだ事を知らせる。これをウホト ウィパ uhotuypa という。これを聞いて親戚が集まる。このように集まって来ることをウコラムコロ ukoramkor という。「団結する」という意味だ。

アプッキ aputki「スダレ」の上にキナ kina「ゴザ」を張って客から見えないようにして死者の尻や体を洗い用意してある死装束（シピニレ アミプ sipinire amip とかライクル アミプ raykur amip という。）を女が着せる（シピニレ sipinire）。男が亡くなっても死装束を着せるのは女だ。まごばあさんは自分の死装束も夫の死装束も用意していた。死装束を自分で用意しておける女はケメイキ エアイカプペ kemeyki eaykappe だ。

白い生地に黒白の糸を入れてある死装束にはあちこち（裾、肩、腕など）に刃物が入れてある。あの世に行ってもこの世に戻って来ることはないように後を振り向かないように切れ目を入れるのだ。お椀でもお膳でも必ず傷をつける（ピルオ pir ? o）。

お膳を頭の前に置く。お膳にはモチ、アキアジ、肉などを置く。枕お経（オイタクコテ oytakkote）は部落の人でしゃべれる人がやる。「今までご苦労さまでした。この世でよく働いた。神のいるところに行ったら神孝行して（カムイ ヌヌケ kamuy nunuke）腹いっぱい食べて（イコイトウパ サクノ ikoytupa sak no）これを持って、自分の先祖の所へ持って行くのだ。」先祖へは「某（死人の名前を言う）が来ても不思議がらずに迎えてくれ」という。

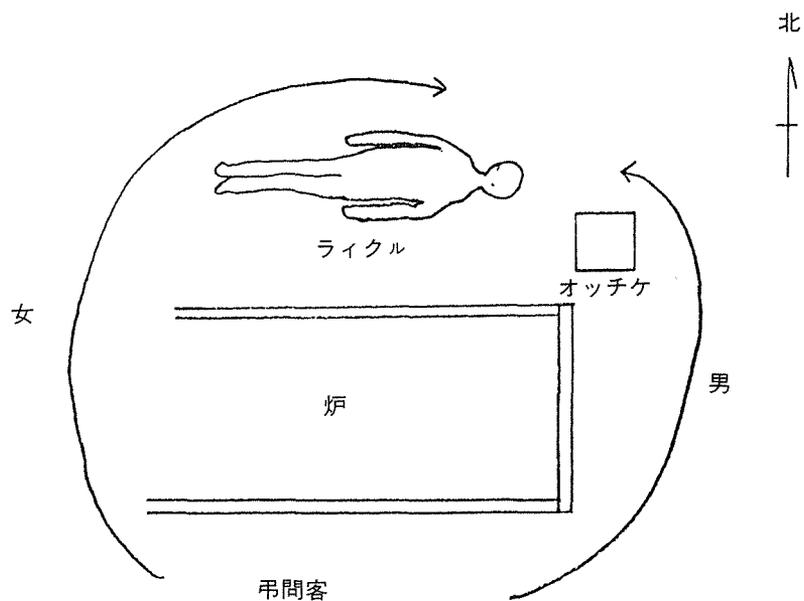
悪いことをして死んだり、曲がった気持ちを持って死んだ人には葬式の時に「ツク カムイ オ

レン イランヌブパ cup kamuy or en irannuppa (太陽の神に言ってやる)、悪いことを全部言ってやるから、地獄へ送ってやるから」と言う。

お膳 (オッチケ otcike) は、仏様にやった後は、皆で食べる。めしには箸2本刺してある。シト sito やアキアジ、肉をお膳に載せる。オッチケにお椀を伏せてフトキ hutoki(白糸と黒糸をよったひも) でくる。これは墓に持って行って壊して置いて来る。

客は、図10のように男は頭から仏に近づき女は足の方から仏に近づき胸や頭をなでる。女は言葉を言いながら泣く。この世との別れに泣くことをシチシカラ siciskar という。

図10. シチシカルをする弔問客



[森崎幸雄氏]

死者をシキナ sikina「ガマ」で編んだキナ kina「ゴザ」にくるむ。ニカブンベ nikapunpe は、位の高い女の死者に巻くもので、ブドウヅルの皮で模様をつけておく。これは女が平生こしらえたもので、男にはニカブンベは使わない。

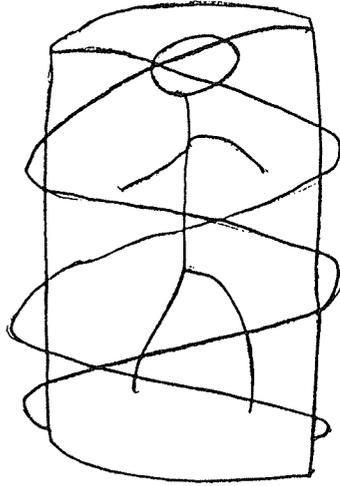
死体を先を尖らせた30cmくらいの長さのサビタの木の串にフトキアツ hutokiat をかけてキナに通す。キナは2枚必要だ。頭もキナの端で包んでしまう。

[森崎幸雄氏]

森崎マツエさんの父親が昭和25年に亡くなったときキナに包んで葬った。

[森崎マツエ氏]

図11. 亡くなった人の包み方



30cm くらいの串でひもをキナに通す

[森崎幸雄氏]

死体は普通の戸口から出すが足を先にして出す。墓場に運ぶときも足を前方に向けて運ぶ。カムイ アイヌコロ kamuy aynukor (恐れ慎む) して後ろを振り向かないで行ってもらうためだ。

死体を運ぶ時に墓標を担ぐ2人が先頭に歩きその後に死体を担いだ人が続く。墓標は魂の案内なので死体よりも先に運ぶ。墓標は、家で作り、長さが5尺5寸から6尺もあるヤチカンバやドスナラの木を使うがこれらの木は墓標にしか使わない木だ。丈夫で長持ちし、やせても芯が残っているくらい硬い木だ。

死体をくるんだものに綱を巻いてその綱に1本の棒を通し2人が前後に立って肩に背負う。担ぐ人は墓場まで交替で担ぐ。

死体は夜にガンピの松明(チノイエタツ cinoye tat) で照らして夜に墓場(トゥシリ tusir またはトイシリ toysir) に持って行き、土葬にした。墓地はトゥシリ コタン tusir kotan とかキムン コタン kimun kotan とか言い、各コタンに1箇所である。農屋では佐藤コウチャンの家の上手の小さい橋の上の少し平らになった所であった。奥の方、コタンの上手の方である。

墓に着くと塩とイケマ ikema の保管していたもので墓穴(トイシリ toysir) とその周りを浄めてから、墓穴の中の壁ぐるりにアプッキ aputki 「スダレ」を張り巡らし死体を埋め、生前仏の大事にしていたものを埋める。男なら刀、煙草入れ、キセル、女ならイタンキ itanki 「椀」、パッチ patci「鉢」などを埋める。その上から土をかぶせる(トイラババ toyrapapa)。土は最期の別れに少しずつかぶせる。墓標(クワ kuwa) を死者の頭の方、東の方に刺す。1回で墓標を突き刺さなければならない。墓地には夫婦の墓標は一緒に並べる。

メナシウシクルの女でも嫁いだ先のスムシクルの墓標にする。逆にスムシクルの女がメナシウ

ンクルの家に嫁いだらメナシウンクルの墓標を立てる。スムンクルとメナシウンクルの墓所は同じ墓地だが句切りがあつて分けられていた。メナシウンクルの墓所は、墓地の西側にあつた。

墓から帰る途中で高台を下りた所で、二人の年寄りがタクサカル takusa kar をする。タクサ taksua「笹の束」を首にかけて（タクサ カル takusa kar）身を浄める。

アイヌは墓参りをしない。家でイチャルパ icarpa「先祖供養」をする。祭りのある度にイチャルパがあるので1年に何回もする。夢見が悪いとイチャルパをする。

墓に死体を出した後にカソマンデ kasomante「家送りをする」をする。浦河では男にも女にもするが、静内では女の死者だけに家送りをする。墓から戻ってからカソマンデをする。

家の近くの邪魔にならない場所を選んで部落の若い者が炉を切つて12畳ほどの広さの小屋（カソマンデチセ kasomante cise）を1日で建てる。大きさはその家の力によって異なる。柱は逆さまに立てる。柱の縄のくくり方も通常とは反対方向である。屋根も壁もモセム mosem（下屋）もある（昔はモセムはなかった）。下屋には流しもある。下屋にはニス nisu「臼」も置いてある。東向きに神窓（ロルンプヤラ rorunpuyar）もある。シソ siso「右座」とハリキソ harkiso「左座」の区別もある。炉は、戸口から入って直接土間のまま炉につながっている。炉の周りにはアプッキ aputki「スグレ」、キナ kina「ゴザ」が敷いてある。

墓地から帰ってきた後で、家送りの儀礼を行う。ハル マラット haru maratto「ごはん」やトノト tonoto「酒」を用意する。客もご馳走をもつて来る。これをハル コル haru kor とかイコオシマ ikoosma という。

カムイノミ「神への祈り」の時に誰それからご馳走を頂いたとご馳走を持ってきた人の名前を告げて燃やす。男がカムイノミを終わると女も入り、エイメク eimek（おすそわけ）する。これは女の仕事だ。男はロッタ rotta「上座」に座る。ムコさんでも孫でもロッタに座る。また、男達は、カムイコイタク kamuy koitak する。ウポポ upopo とかりムセ rimse はいっさいしない。

カムイノミをしてご馳走を食べてから、家に火をつけて焼く（ウフィカ uhuyka）。西側から火をつけてから北と東に火をつける。火をつけるのは2人だ。妙に風が強くなるものだ。あの世に行ってもこの世と同じように苦労しないように刃物でもイタンキ itanki「椀」、パッチ patci「鉢」でも柄に傷をつけたり（ピルオ pir ʔo）、衣類は切ったりしてから焼却した。米やヒエなどもサラニブ saranip「小出し袋」に入れて一緒に燃やす。

[森崎幸雄氏]

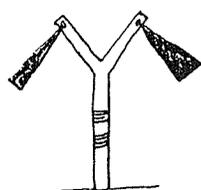
## 墓標

メナシウンクルの男の墓標は形が又木になっているが、スムンクルの男の墓標はオブ クワ op kuwa と呼ばれ、まん中に上に星（ノチュウ nociw）と下に月（ツブ カムイ cup kamuy。上弦の三日月模様）の模様を彫り炭を塗る。この模様はスムンクル シロシ sumunkur sirosi と呼ばれる。東に向けて墓標を刺す。星と月を入れるのは死ぬと天国に行くからだ。天国には星と月があるからだ。メナシウンクルの女の墓標はカンザシ クワ kansasi kuwa という。

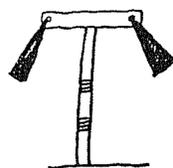
横木の両端に穴を開けてサラムベ sarampe「布の一種」を垂れる。杖の部分の下部に2箇所白黒にフトキアツ hutokiat を巻く。スムンクルの女の墓標は、シト クワ sito kuwa と呼ばれ、丸い穴がまん中に開いている。穴のすぐ下方に上に星と下に月を入れ炭で黒く塗る。黒い布を男のネクタイのように巻く。杖の部分の下部に12回ずつ2箇所飾りとしてフトキアツ hutokiat を巻く。2箇所の間は10cmくらい間隔をあける。

[森崎幸雄氏]

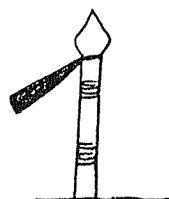
図12. 墓標の違い



メナシウンクルの男のクワ



メナシウンクルの女のクワ  
(カンザシクワ)



スムンクルの男のクワ  
(オブクワ)



スムンクルの女のクワ  
(シトキクワ)

図13 スムンクルの墓標につける印



死んだ人は戸口 (アパ apa) から外に出さないで、ウサル úsar の壁を破って出した。死んだ人を墓に埋葬したあと、河原に小さな小屋を作り、その中で御飯を炊いて皆で食べ、

カムイノミ kamuy nomi をしたあと、小屋に火を付けて焼いた。

[三石 M.H.]

#### 6-5-7. 死生観

先祖に対してイチャルパ ヌサ icarpa nusa (先祖供養の祭壇) を作る。一本一本、先祖が何人いても、お供え物、お菓子でもなんでも持ってきて、ここで祭って、踊りをやる。ヌサ ミンタル nusa mintar 「祭壇前の庭」でやる。ヌサ カムイ nusa kamuy 「祭壇の神」だから。

イチャルパ ヌサ icarpa nusa に、主だった人が、仏さんに、仏さん何人いても、何を持ってきて、何の酒を持ってきたから、仏さん全部で分けて食べるように、飲むようにということをして代表して言う。火の神(お不動さん)をアペ カムイ ape kamuy とか、アペ カムイ フチ ape kamuy huci という。火の神が代表してくれる。アペ カムイ フチ ape kamuy huci に頼んで、イナウ inaw 「御幣」を一人に一本ずつあてがって、そして、自分らの思いの先祖、誰も知らないから、自分の思った先祖に物を祭って、分けて食べるように、って、イナウを代表にして先祖祭りをやる。自分の知っている先祖の名を言って、イナウに供え物をする。すると、その人達が他の先祖にも分けてくれる。そういうしきたりになっている。その時に、イナウの前で火を焚く。アペカムイにパスイ スイエ pasuy suye 「箸でお酒を上げる」してイナウの頭に酒をチクカ cikka 「たらす」する。イナウの頭にこぼす。イナウの頭に三角にチャロ caro 「口」を切っている。そこにこぼすのだ。食べ物をイチャルパ icarpa nusa の前に置く。イチャルパ icarpa 「先祖供養」はトイラパパ toyrapapa とも言う。土の上に直接置かないと先祖に届かない。入れ物に入れない。アペ フチ カムイ ape huci kamuy に、先祖にイチャルパ icarpa するからカムイ フチ セレマクコル ナンコル ナ kamuy huci sermakkor nankor na 「火の神よ。守ってくれ」と言って祈る。最初は家の中のアペフチに言う。

[森崎幸雄氏]

魂というものは確かにある。俺の妻の母親(浦河の人)は急死した。その時、俺は急性肺炎を起こして病院に入院していた。ウタリではカスオマンテ kas omante といって、家をこしらえて焼いて供養するのだが、それをちゃんとしていなかったらしい。ばあさんが、寒くて、天国にいれないので、にいさんなんとかしてくれ、という夢を見た。どんぐい(イタドリ)の柱が雪の中に立って、それも風に吹かれて折れて、むしろバラバラ揺れている夢を見た。はさみも箸も忘れて、ちゃんと送らなかった夢を見た。そのことを親戚に手紙に書いてやったら、当たっていた。夢にみたとおり、ちゃんとやっていなかった。

[森崎幸雄氏]

親戚の女の人が61年に亡くなった。カシオマンテ kasi omante 「家送り」しなかったので、親戚の人みんなが夢をみるんだと。あの世へ行っても生活ができないと言っている夢を見た。それで、家を作って送ってやったら、あとはなんともなくなった。男が亡くなった時も、老人だったら家を送る。若い人は、自分の先祖のそこへ行って世話になる。アイヌには閻魔様とか、

そういうことはない。男は男の先祖、女は女の先祖のところへ行く。あの世で男と女は一緒に住んでいないという話だ。供物あげるときも、じいさんはじいさん、ばあさんはばあさんへ、別々にあげる。一緒にまぜてはあげない。別にあの世をみてきたわけでもなかろうから、夢にでもみて、そういうふうにする事になったのではないかと思う。

[森崎幸雄氏]

このあいだ、静岡から禅宗の坊さんが来た時、アイヌに坊さんあるか、寺あるか、と聞かれたので、「ない。でも、くやみに来る人の中に、この人なら、とみんなに尊敬される人がいるので、その人に頼んでやってもらう。そのかわり、まちがったことしたら、けんかして、やり直しまでやるものなんだ、と言ったら、坊さんは、「それが本当の供養なんだ」と言った。

[葛野辰次郎氏]

### 6-7. 交易・通婚・戦争

昔、ポヨの沢で魚を釣ったり、ヒエを作ったり、砂金をとったりして生活していた。そこによく十勝のアイヌがトパットゥミ topattumi「急襲」に下がってきた。そののばあさんだか家内がウオーイウオーイという危急の声をあげた。オヤジが声を聞いたので岩を下がって川を渡って行くと悪口を言うので、その男を毒弓で殺したら、岩の下の渦に入ってしまった。その岩をラル クル rar kur という。和人は仏岩といっているが、今でも死人が見えるという。その男は十勝のトパットゥミの斥候だった。

農屋から4kmほど上がったところに、サルトウンナイ sartunnay という小沢がある。そこにはフキもウドもよくできて食べ物が多い。そのものを食べたら腹をこわす。農屋で酒盛りがあって、十勝からトパットミの斥候に来た者を捕まえるが、どこから来たかと尋ねてもなかなか言わない。火の神カムイ ウチ kamuy huci にたのんでどこから来たか言わせようとお祈りした。するとそのトカチウンクル tokaci un kur「十勝の人」は、酔っぱらうとタプカル tapkar「踊り」をして、その最中に折れた刀の先を背中に背負って(エカイタムポ ekaytampo という)斥候に来たと白状した。おまえにここの女を世話するから見合いせよとだまして仲間の居るところへ道案内をさせた。サルトウンナイ sartunnay まで来ると何10人とトカチウンクルがいた。日高は米でもなんでもとれると聞いているから十勝からトパットゥミに来る。眠っている間にみんなを殺した。その死人達がフキやウドになった。そのフキやウドを食べると仕返しに腹をこわすのだという。この話は、孫ばあさんやじいさんから聞いた。自分も若いときにウコチャランケ ukocaranke「言い争い」をよくした。イソイタク isoitak とも言う。

[森崎幸雄氏]

今の無線のある山(無線山)は、昔、笹山と言った。敵が襲来した時に、オホホーイと叫ぶ場所であった。その声は村中に伝わるのでその声を聞くと昔村中が戦いの準備をした。戦いは、毒の矢だ。

[森崎幸雄氏]

塩は貴重品であった。塩は金持ちの人しか手に入らなかった。浜の人から手に入れたり、函館まで交易に行き手に入れた。クマの皮やシカの皮を持って行った。南部衆や新潟衆とも顔なじみになって、北海道へその人達が渡って来た。

交易に使う舟（ポロ チブ poro cip）は舟板のつなぎめにトドマツの松脂（ウンコトウク unkotuk）を塗る。この舟で函館まで行って交易したという。

[森崎幸雄氏]

浜の人でもシカやクマを捕っていた。

[森崎幸雄氏]

交易に出る舟は、丸木舟でもガンピの皮で囲いを大きくして作ったそうだ。まごじいさんのシノタは、交易に出たらしい。

[森崎幸雄氏]

昔、和人の砂金掘りがいた。アイヌの女と結婚して砂金を採っていた。ある時、ベンケイ penkey「輸送船」で米を揚げ、シントコ sintoko「行器」にしまってから山に行った。妻は子供達に米を食べさせたかったので、その米を盗んで食べさせると、米の盗まれたことを知り、焼き棒で妻の手に孔をあけた、という話がある。

[森崎幸雄氏]

農屋の人が死んだら三石からも葬式に行った。アイヌの人達は人が死んだら誘いあって葬式に行ったものだ。

[三石 M.H.]